

## 日本人会の創立時を思う

指揮者 佐藤 菊夫

1957年5月に結婚式を挙げ、妻と共にウィーンに留学したのは、もう半世紀も前になります。

当時を思い浮かべると、米国通貨が固定相場の1ドル360円、大学新卒の月給が1万円。勿論、海外観光など許される時代ではありませんでした。オーストリアへの留学希望者には、給費留学制度がなく、文部省と外務省の課す私費留学試験に合格しないと、パスポートが得られず非常に狭い門でした。

当時、一番短時間でウィーンへ渡航するルート（羽田～アンカレッジ～コペンハーゲン～プラハ～ウィーン）は、北極回りの50人乗りのプロペラ機を利用する航路が出来たばかりで、約24時間もかかりました。おかげでエンジンやプロペラの轟音が、ウィーン到着後1週間も耳について離れませんでした。

東京～ウィーン間の片道航空運賃は約25万円という高額でした。そのため留学生のほとんどが、貸客船（横浜港～フランス・マルセイユ港、列車でマルセイユ～ウィーン）を利用する方法をとっていました。貸客船を利用すると約1ヶ月以上の日数を要しますが、運賃は10万円弱ですので、留学生は日数がかかっても安い貸客船を利用するのが普通でした。

私達がウィーンに到着した頃は、ウィーン在住の日本人は、大使館員とその家族、15、6人、国際原子力機関の関係者家族6、7名に加え、ウィーン国立音大、ウィーン大学及び工科大学の留学生を合わせても12、3名ほどで、合計は僅か30余名といった程度でした。

当時の日本大使、古内広雄さんはドイツ語の達者な好楽家でもあり、オーストリア国より音楽功労賞を受賞され、後に衆議院議員に当選し、政治家としても活躍されました。大使は、正月には大使公邸で、新年会を盛大に開催し、ウィーン在住の日本人全員をお招きして下さいました。私達は久しぶりに日本酒で乾杯し、お寿司やお雑煮、お節料理のご馳走に預かり、この日ばかりは異国を忘れ、日本の正月気分になれました。

大使公邸でのこの新年会の集いによって、個人的にもお互いが親密にお付き合いをする機会が得られるようになったのですが、1958年3月にヴァイオリンを勉強中の岩田聖子（きよこ）さんが、ウィーン大学付属病院に入院中、胃癌のため病死するという大ショックを私達は受けたのです。大使



岩田聖子さん(1929～1958)の墓標＝クレマトリウムで08年11月15日撮影

館の異例な取り計らいで、3日後に九州の福岡からご両親が駆けつけられました。

古内大使は急遽大使公邸に岩田さんのご両親を招き、大郷正夫参事官（後にフィンランド大使）と私達夫婦が呼ばれ、岩田聖子さんの葬儀について話し合いが行われました。ご両親の切なる希望は、第一に「ベートーヴェンやブラームス、モーツァルトなどの墓碑や記念碑を祀る歴代の楽聖の墓地として有名な、ウィーン中央墓地の葬祭場において葬儀を挙げたい」。第二は、「学業半ばで楽都ウィーンで命を落としたわが娘を、ウィーンと彼女の故郷である福岡に分骨したい」とのことでした。しかし、第一の希望はカトリック信者でないため許可されず、中央墓地の真向かいのクレマトリウムになったのです。

葬儀および納骨は、岩田さんのご両親のご希望と、大使及び参事官のご意見を十分に汲み入れ、宗教にこだわることなく音楽葬の形をとって、私は式次第を作成しました。クレマトリウムの葬祭場において、岩田さんの恩師モラヴェッツ教授やウィーンの知人友人を始め、在住日本人の殆ど全員が参列されました。



中央墓地並木

ウィーン国立歌劇場の男声合唱団による荘厳なレクイエムと、遠山信二氏指揮、私達留学生による“死者のための混声合唱”を奏楽し、植野豊子さん（現服部豊子さん）ヴァイオリン独奏によって、厳粛に葬儀が行われました。

岩田さんの死は、日頃お互いに励まし合い、学び合い、助け合ってきた私達にとっては、留学生活の中でも、最も悲しい出来事に遭遇したのです。あれから50年を経た今も、岩田さんはクレマトリウムに静かに眠っています。私は妻とウィーンを訪れる毎に、岩田さんの墓前にお墓参りすることにしています。その墓前にはいつも四季折々の美しい花が飾られており、きっとウィーン市の墓地管理の暖かい心づくしだろうと、感謝しつつ合掌しています。

さて、岩田さんが亡くなられてまもなく、元埼玉大学学長で理学博士の藤岡由雄先生がご家族と共に、国際原子力機関に赴任してきました。先生は戦前の若かりし頃、ドイツで学び、オーストリアにもよく通じておられ、私達留学生はパパのように慕い、当時の在住日本人に対しては、いろいろとお世話下さり相談にも乗ってくれました。藤岡先生は岩田さんの死因について、私へいろいろと質問されましたが、その折の日本人の方々の対応に対し、痛く感銘を受けられたようでした。

先生は「ウィーン在住の日本人に、一旦緩急のある場合は、日本人同士が今後ともより強い連帯感を持ち、何かにつけ連絡しあって助け合うべきだ」と主張されました。

その旨を私は早速、古内大使に申し上げたところ、大使は「この機会に藤岡先生を会長として、『ウィーン日本人会』を立ち上げたらどうか」と提案されたのです。

かくして、『ウィーン日本人会』が藤岡先生を会長として、また、幹事には私の他に、当時神学の研究のため、ご家族で留学中の上智大学の安齊伸先生に相談を持ちかけ、慎重審議の上、2人が当たることになりました。確か1958年秋に発足したように記憶しています。

私は今つくづく、半世紀前のウィーン時代に思いを馳せるにつけ、『ウィーン日本人会』の設立は、故岩田聖子さんが、未永くウィーン在住日本人のために遺された置き土産のように思えてなりません。

- |         |        |                   |
|---------|--------|-------------------|
| 第1回目の行事 | 1959年春 | 岩田聖子さんのお墓参り       |
| 第2回目    | 同年秋    | デュルンシュタイン古城へバスハイク |
| 第3回目    | 1960年  | ウィーンの森へのバスハイク     |

1960年10月、紅葉した街路樹の枯葉を踏みしめながら、4年間の思いを万感胸に秘め、ウィーン生まれの娘（現在ウィーン在住、パッハー真理）と共に私達は、ウィーンに別れを告げ帰国しました。

（日本人会会報「ウィーンの風」2005年12月5日発行、佐藤菊夫さんの寄稿より）

オーストリア日本人会の設立に立ち会われた佐藤菊夫さんに改めて、お話をうかがおうと東京の自宅にお電話すると、佐藤菊夫さんは「志半ばで急逝された岩田聖子さんの死をきっかけに、日本人同士でこれから協力していきましょうと結成されたのが、日本人会でした」と感慨深げでした。

佐藤さんは50年前を振り返り、「当時は、今とは比較にならないくらいウィーン在住の日本人は少なかった。それぞれが現地の方々と交流することが主だった。そんな日本人がたまに集うと、本当に仲がよく、家庭的な雰囲気できずなを確認する場になりました」と話していました。

<佐藤 菊夫（さとう・きくお）>

1957年、ウィーン音楽大学に留学。指揮、作曲を学び、ウィーンアカデミー管弦楽団及びウィーン古典合奏団に入団し、ヨーロッパ各地で演奏活動に参加。61年に帰国。東京管弦楽団・音楽監督、東京合奏団主宰・音楽監督など現在も多方面で活躍している。